
ボクの使命～世界の理～

宇野午葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクの使命～世界の理～

【Zコード】

N1847E

【作者名】

宇野 午葉

【あらすじ】

「ボクは管理者。“魂の壺”的蓋を、開け閉めするだけの存在」。

- ・・・『最後の願い』の世界観を補足する物語です。天使と死神の誕生秘話？が読めます（笑）

(前書き)

天使の名前が出てきますが、宗教は全く関係ありません。あくまで
フィクションとして、お楽しみ下さい。

ボクは魂の管理者。

いや、管理者と云ひほどボクは偉くないか。

ボクは、毎日時間がきたら壺の蓋を開けて、時間になつたら壺の蓋を閉める。

ただ、それだけ。

ボクに与えられた仕事はたつたそれだけ。

壺。

壺は“魂の壺”と呼ばれている。

青くて

赤くて

黄色くつて

緑だつたり

紫色だつたりする

不思議な色の壺。

壺は新しい魂が産まれる場所。

どういう仕組みになつてゐるのかは分からぬけれど、蓋を開けると

キラキラと輝く魂が溢れ出す。

壺から溢れ出た魂は“転生の部屋”に入り、やがて地上に産み落と

される。

そして、地上で生をまつとうした魂は“再生の門”をくぐり抜け天界に戻つてみると、再び“転生の部屋”に入り地上に産み落とされる日を待つ。

魂のサイクルはこんな感じ。

いつからこんな風になつてゐるか分からぬ。

いつからボクがここに居て、何故こんな風に魂のサイクルを理解しているのかも分からぬ。

ボクは氣がついたら、毎日時間通りに壺の蓋を開けては閉め、開けては閉めを繰り返してた。

別に不満がある訳じゃない。

壺から溢れ出る魂は、いつも綺麗で、ボクはそれを見るのが大好きだから。

大きさも、色も、輝きも一つ一つ違う魂は、見ていて飽きる事はない。

でも、壺が開けられる時間は限られているから、ボクは壺の蓋が閉まつてゐる多くの退屈な時間を、地上の様子を見る事で消費する。

壺の横には、地上の好きな場所を見下ろすことが出来る穴が開いているのだ。

地上では、生を受けた魂達が歌い、泣き、笑い、怒り、喜ぶ様子が

見える。

ボクはいつもその様子を眺めては、一緒に歌い、泣き、笑い、怒り、喜ぶのだ。

ある時。

生をまつとうして“再生の門”へ向かうはずの魂が、地上をさまよつているのが見えた。

最初はあまり気にしなかった。

だけど、地上をさまよう魂の数は徐々に増えていき、“再生の門”をぐぐるはずの魂が少なくなつてくると、さすがに心配になる。

今まで調和の取れていたサイクルが崩れとびつなるか・・・

漠然とした不安にかられて、地上に魂を回収しに行こうかとも思つたが、ボクは壺の側を離れる訳にはいかない。

悩んでいるうちに、壺の蓋を開ける時間になった。

キラキラ

フワフワ

色も、形も、大きさも様々な魂達。

壺から溢れ出る魂達を眺めていると、いい事を思いついた。

ボクは魂の中から、一際輝きの強い魂に手を伸ばす。

すると、その白く輝く魂はボクの誘いに応じるよつこ、ちょこんと手のひらの上に乗つた。

温かい・・・

初めて魂に触れたボクは感動した。

ずっと、気がついたら一人この場所に居たボクには、その魂の温もりがひどく懐かしいものに思え、泣きそうになる。

いけない。

感傷に浸つてゐる場合じゃないな。

ボクは白く輝く魂から手を離すと、壺の蓋を閉めた。

他の魂達が“転生の部屋”へ向かう中、ボクが触れた魂はフワフワとボクの周りに漂つっていた。

「君にお願いがあるんだ」

手を差し伸べ、白く輝く魂に語りかけると、その魂は再びボクの手のひらの上に収まつた。

「地上でさまよつてゐる魂を、導いてやつて欲しい。やつてくれるかい?」

ボクの問いかけに、白く輝く魂は一瞬光を強めた。

ボクはそれを肯定の意味だと捉え、白く輝く魂に感謝の気持ちを伝えるべく、優しくキスをした。

すると、

魂は今までとは比べものにならないくらい、強い光を放った。

あまりの眩しさで、思わず目を瞑る。

目を開じても、しばらくはチカチカと光が瞬いて見えた。

やがて、光が治まるのを待つて、ボクは恐る恐る目を開ける。

「...」

まず目に入ったのは純白の翼。

それから、艶やかな黒い髪。

濡れて光る黒曜石のような瞳。

それは柔らかな微笑みを浮かべた一人の女の子のものだった。

茫然とするボク。

だって、どうでしょう？

ここにはボク以外に魂しか動くものは居なかつたんだから。

彼女は、あんぐりと口を開けて突っ立つてるボクを見ると、純白の翼を広げて跪き、頭を下げる。

「わたしに生と使命を与えて下さったあなた様に感謝します、創造主。」

ボクの耳に届いた心地よい音色が、その女の子が発した言葉だと理解するのに、少し時間がかかった。

それから、はつと気がついて女の子に言ひ。

「創造主？ボクが創造主だつて？！違つよ！全く違つ。ボクは“創造されたもの”さ。間違つても創造主とは呼んではいけない」

女の子は跪いたまま、腑に落ちない表情でボクを見上げる。

「それに使命なんて大げさなものでもないし。君にはちよつとボクの手伝いをして欲しいだけ。まあ、立つて」と彼女に促す。

「ではマスターとお呼びすればよろしいですか？」

可愛らしく上目遣いで尋ねる彼女に、ボクは慌て首を横に振つた。

「ボクはメタトロン。ただここに居て、毎日壺の蓋を開け閉めするだけの存在だ。マスターだなんて、大層なものじゃない」

「しかし・・・」

何か言いかけた彼女の言葉を遮つてボクは話続ける。

「ボクと君は家族であり、友達だ。ボクの事はメタトロンと呼んでおくれ。君の事は・・・そつか。産まれたばかりだからまず名前をつけなきやね。どんな名前がいい？」

ボクがそう訊くと、彼女はにっこりと微笑んで

「メタトロン様にお任せします」と答える。

キラキラと眩しい彼女の笑顔は、朝日に反射して輝く湖のようだ。

「ジブリール。ジブリールなんてどうたい？」

「

ボクの提案に彼女は満面の笑みを浮かべる。

「可愛らしい名前をありがとうございます、メタトロン様」

ジブリールは喜んでくれたようだが、ボクはひとつ氣に入らない事があった。

「ジブリール。ボク達は家族であり、友達だって言つただろ。ボクの事は呼び捨てで構わない。あと堅苦しい言葉使いも禁止」

ジブリールは少し考え込んだが

「うん。わかったわ、メタトロン」

と言つて笑つてくれたので、ほっとした。

やがて、ジブリールは地上の魂達を“再生の門”に導く為に地上へと向かつた。

ボクは地上の様子を穴から見ていたが、迷子の魂の数は意外に多くて、ジブリール独りでは大変そうだった。

そこで次の日、ボクは壺の蓋を開けた時に、ジブリールの時と同じ

よつに、一つの魂に手を差し伸べて、こうお願いした。

「地上の魂を救つて」

と。

その青く輝く魂は、ボクの願いを受けて、漆黒の翼と、輝く金色の髪に、瑠璃色の瞳を持つ少年の姿になった。

漆黒の翼を持つ少年は、なかなか愉快な少年だった。

少年は、まずボクに一礼すると、産まれた喜びを歌にして披露してくれた。

それから、ボクがその少年に“イスラフイル”と言う名前を付けてあげると、名前をくれた感謝の気持ちだと歌を歌い、仕舞いにはボクの手を取つて踊り出した。

やがて、休憩しに戻ってきたジブリールも交えて、三人で友情の歌を歌い、次に壺の蓋を開ける時間になるまで三人で輪になつて踊つた。

今まで独りだつたボクには、三人で過ごす時間はとても楽しいものだつた。

ボクは相変わらず、毎日時間になると壺の蓋の開け閉めを繰り返す。

ジブリールとイスラフイルは翼をはためかせて、地上を飛び回る。

暇なボクは、その様子を穴から眺めていた。

ボクは毎日“魂の壺”の蓋を開ける。

壺からは毎日新しい魂が溢れ出る。

その上、何度も“再生の門”をくぐり、転生する魂もいるもんだから、地上に産み落とされる魂の数も徐々に増えていく。

当然、ジブリールとイスラフィルの仕事の量も増えてくる。

二人では仕事をさばききれなくなつたので、ボクは仲間を増やす事にした。

壺から溢れ出る魂に手を差し伸べる。

ボクが触れると、魂は白い翼や、黒い翼を持つ者に姿を変えた。

仲間が増えた事で、静かだったこの場所も、一段と賑やかになつた。

“魂の消滅”に最初に気づいたのはイスラフィルだった。

転生を繰り返した魂は摩耗し、やがて消滅する。

良く考えれば、毎日魂が壺から溢れる中で、地上の魂を調整するには、ある程度の魂の消滅は必然な結果だと思つ。

ボクは冷静にそう分析した。

そんなボクとは対象的に、心優しいイスラファイルは、魂の消滅に立ち会い、消えゆく魂を哀れみ、讚え、労い、その気持ちを歌にした。

イスラファイルの優しい歌声は、魂に直接響く不思議な音色。

彼のその歌声は、消えゆく魂に安らぎを^{アラギ}与え、残される魂に希望を与えた。

やがてイスラファイルと、彼と同様の黒い翼を持つ仲間達は、魂の消滅に立ち会いう事を自分達の仕事とした。

単純に、地上の魂を“再生の門”に導くだけでいいと考えていたボクは、イスラファイルが違う仕事をし出した事に驚いた。

でも、よく思い返してみると、ボクは最初に“地上の魂を救つて”とイスラファイルにお願いしたんだつけ。

だったら、イスラファイル達が自分達の能力を使って、消えゆく魂に安らぎを^{アラギ}与えるのも、残される魂に希望を^{アラギ}与えるのも、決して間違つた事じゃない。

それから、地上の魂が増えるにつれて、仲間の数も段々と増えいつた。

いつしか、白い翼を持つ仲間達は“天使”と呼ばれ、黒い翼を持つ仲間達は“死神”と呼ばれ、ボクは“神”と呼ばれるようになる。

“天使”とは、神の使者として、魂を天に導く者という意味。

“死神”とは、神の代行者として、死に立ち会う者という意味がある。

ボクは“神”と呼ばれる事に抵抗があつたが、（だってボクも“創られたもの”だし）

「大所帯となつた天使と死神に組織的な活動をさせるには、トップに立つ者が必要だ！」

と言つジブリーに、無理やり神の座に祭り上げられた。

さらば、

「メタトロンは壺の蓋を開ける以外は暇だよね」

と言つイスラファイルの一言で、天使と死神達を管理し、それぞれに仕事を割り振る役目をやらされ、ボクは忙しい日々を送ることになった。

この役目は、ジブリーとイスラファイルが居なくなつた今も変わらない。

忙しい日々の中で、ボクは唯一の楽しみは“地上の様子を見る”こと。

それは、ジブリーとイスラファイルが地上を飛び回っていた頃から変わらない、ボクの趣味。

ほら、見てイスラファイル。

君によく似た漆黒の翼を持つこの少年は、初めて魂の消滅に立ち会

つて涙しているよ。

ああ、どう思うジブリール。

君によく似た純白の翼を持つこの少女は、君と違つて二コリとも笑わないんだ。

天使だつてサービス業なんだから、スマイルは必須なのに・・・

こうして、今は思い出の中に居る、二人に話しかけるのがボクの日課。

いつか

“魂の壺”が壊れる日が来るまで

二人が飛び回つた地上を見つめ

二人が愛した人間達を守る

それは

二人がボクに託した

“最後の願い”

それを叶えることが

ボクの使命

(後書き)

この作品は、死神の役割や、天使と死神の始まりを考えてできた、『最後の願い』の補足的な物語となりました。今後は死神＆天使シリーズとして、関連する物語を作る予定です。是非、次回作品も読んでください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1847e/>

ボクの使命～世界の理～

2010年10月11日01時31分発行